

調査報告：沖縄における沖縄戦の犠牲者をめぐるポリティクス —沖縄人元「慰安婦」の語りに着目して—

1. はじめに

報告者は、大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」の「平成22年度大学院生調査研究助成(第2次)」を受け、「沖縄における沖縄戦の犠牲者をめぐるポリティクス—沖縄人元「慰安婦」の語りに着目して—」と題した調査を東京(7日間)と沖縄(28日間)にて調査を行った。以下で、その調査で得られた成果について報告する。

2. 調査の背景と概要

報告者は、沖縄における沖縄戦の犠牲者をめぐるポリティクスの中で、十分に論じられてこなかった「慰安婦」の問題に焦点をあて研究を行ってきたが、本調査ではとりわけ見落とされてきた沖縄人「慰安婦」に着目した。当初、沖縄人元「慰安婦」へのインタビューを行い、彼女らの語りを分析することを通じて、沖縄戦の犠牲者をめぐる政治の一側面を明らかにすることを目的とする予定であったが、調査を行う中で、以下に記すように当事者へのインタビューが困難であることが徐々に明らかになり、「沖縄における沖縄人「慰安婦」に対する社会的意味づけ」へと重点をずらし調査を行った。

予備調査 **訪問先：女たちの戦争と平和博物館、「慰安婦」に関する研究者(東京)**

まず、予備調査として、まずは東京都早稲田にある「慰安婦」に関する資料を収集・展示しているアクティブミュージアム「女たちの戦争と平和博物館」にて、「慰安婦」制度を裁いた民衆法廷である国際戦犯法廷(2000年開催)の時の沖縄における新聞記事を収集した。また、東京での調査では、元「慰安婦」だった女性へインタビューを行ったことのある作家であるA氏を訪問し、情報収集を行う予定であったが、電話による取材から、沖縄でA氏がインタビューした元「慰安婦」はもう亡くなっている、連絡が取れなくなっていることが分かり、電話にて調査の仕方についてアドバイスを受けた。

本調査 **訪問先：辻花街跡地、平和祈念平和資料館、関係者自宅等(沖縄)**

次に、本調査として、沖縄県の沖縄島に渡った。今回調査の最大の目的であった辻花街で遊女であった女性(沖縄人「慰安婦」のほとんどが那覇にあった辻花街出身。辻花街で働く女性たちはジュリと呼ばれる)へのインタビュー調査は実現しなかった。実際に調査に入ってみると、辻花街にいたということ自体への複雑な意味づけ(琉球の伝統/女性差別の象徴)と「慰安婦」への差別意識が強固であることが見えてきた。さらに、体験を話している人は少ないという点、戦後65年以上経過し、当事者たちの高齢化しているという点なども加わり、当事者へのインタビューは困難であった。そこで、元「慰安婦」自身の

2011年6月18日(土)提出 4000字程度
人間科学研究科 社会環境学
コミュニケーション社会学 博士課程2年
玉城福子

語りというテーマから、沖縄人元「慰安婦」を取り巻く人々の語り、まなざしというテーマへ少しずらした形で調査を進めた。まずはジュリへの意味づけを明らかにすることが必要であった。そこで、那覇市にある沖縄県立図書館や女性関連の書籍を集めている男女共同参画センターの附属図書館「ていいるる」にて、沖縄の「慰安婦」や辻花街に関する資料を収集した。また、近年「慰安婦」問題に取り組んでいる女性史家、活動家に半構造化インタビュー調査を行った。関係者からの話から、1986年ごろ、辻花街の祭りをめぐって、辻花街の関係者と女性運動家の間に行政を巻き込んだ論争があったことが分かり、これに関連する資料を那覇市女性共同参画センターにて収集した。また、この問題となった辻花街の祭りに参加し、祭りの主催者(辻花街の遊女の子息ら)にインタビューを行った。

3. 内容—ジュリ馬行列をめぐるコンフリクト—

収集したデータは多岐にわたるが、今回は、沖縄人「慰安婦」に多かった辻花街のジュリであるということが、戦後どのように意味づけられてきたのかを中心に整理したい。調査の中で明らかになった辻花街の祭り「ジュリ馬行列」をめぐるコンフリクトは、それぞれの観点の違いが先鋭化していたため、このコンフリクトに対する評価を参考にしながら、分析していく。一般的に、ジュリ馬行列とは、年中行事の一つである旧廿日正月祭りの二つのパートである神事と奉納演舞のうち後者のことを指す。

具体的には、以下で「当事者」「祭りを支えた人たち」「祭りに反対した人たち」という三つのグループにわけ、それぞれの①祭りに対する評価、②ジュリの意味づけ、③ジュリと「慰安婦」の関係についての見解を整理する。

● 【当事者】：ジュリとしての経験を持つ者

データ：当事者の自伝、当事者へのインタビューを元にした小説

・祭り：精神的支え、誇り

ジュリ自身で祭りに関して語っているのは、上原栄子のみである。彼女は、1980年代に2冊の自伝を書き、その後も雑誌や新聞等で祭りの復活を訴えている。彼女の自伝からは、琉球舞踊・三線・料理などの文化、辻の発祥の伝説や祖先や地域の神への信仰は、貧しがゆえに親に売られた女性たちの精神的な支えになったことが示唆されている。そして、旧廿日正月祭りはそうした精神的な支えの象徴として語られている。

・ジュリ：特殊と普通の間揺れる自己イメージ

ジュリについて、上原栄子は、特殊な社会の犠牲者として語る一方で、日常生活、そして恋を語ることで「普通」の女性であることも同時に強調している。

・「慰安婦」：やや連続(転落のイメージ)

元ジュリの女性へのインタビューをもとにして書かれた船越義彰の小説『遊女たちの戦争』をみると、当時のジュリにとって「慰安婦」になるということは「転落」を意味したということが示唆される。ジュリと「慰安婦」は連続性のあるものとして捉えられつ

2011年6月18日(土)提出 4000字程度
人間科学研究科 社会環境学
コミュニケーション社会学 博士課程2年
玉城福子

つも、よりマイナスのイメージが「慰安婦」には付与されていたと考えられる。また、小説の中では、「慰安婦」になったジュリたちは、借金や抱え親との関係、空襲による辻花街の消失など、様々な複合的な条件の中で限られた選択肢しかなかったことを強調しつつも、強制連行の朝鮮人たちよりは選択肢があったことが描かれている。

● 【祭りを支えた人々】：ジュリの子息

データ：辻新思会の関係者へのインタビュー、新聞記事

・祭り：ジュリたちへの慰霊、琉球文化の表れ

祭りを支える母体として、辻新思会がある。これらの団体は、辻の文化を継承するための団体で、辻の関係者(ジュリの子息等)を中心に担われている。辻新思会の関係者の話によると、現在、旧廿日正月を行う意義は、辻花街で生き、死んでいった女性たちへの「慰霊」であるという。こうした思いから、彼は、フェミニストと地域社会の両方に反発を持っている。沖縄のフェミニストたちが「ジュリ馬行列」に反対した時、「女性が、(恵まれない立場であるジュリ)女性に石を投じている」ように感じたという。また、地域社会も、祭りを地域おこしの観光の目玉として利用しようとしており、「慰霊」を重視する辻新思会としては、違和感があったという。

・ジュリ：琉球文化の創造者・担い手

インタビューの中では、女性たちが売られたことは悲劇である一方で、そこで文化を作り上げたことは評価すべきことであり、琉球の文化として残していくべきものであることが強調されていた。また、ジュリは売春婦や遊女ではなく、琉球独特の家族制度に近いものとして語られていた。

・「慰安婦」：非連続(強固な「売春婦」嫌悪)

インタビューの中では、「慰安婦」については話をそらされてしまい、その後話を聞くことはできなかった。たくさんの兵士を相手にしなければいかなかった「慰安婦」は、彼の中のジュリ像と不一致であるため、触れたくない話題だったのかもしれない。

● 【祭りに反対した人たち】：沖縄のフェミニスト、辻通いをしていた人の家族

データ：フェミニスト(女性史家・活動家)へのインタビュー、『沖縄・女たちのまつり うないフェスティバル86報告書』、新聞記事

・祭り：売春を容認

1986年、辻の祭りをめぐって、沖縄のフェミニストから抗議の声が上がった。「うない」という女性の文化祭りにおけるワークショップの中で「ジュリ馬行列」が取り上げられたが、ジュリ馬行列に反対をした人々は、父親が辻通いをして母親が苦勞してきたのを見てきた人々であったという。その背景には、ジュリ馬行列が、売春を助長させるという主張があった。現在、辻は風俗店やラブホテルが立ち並ぶ地域となっているため、そうした地域を練り歩く行列への批判が高まった。

2011年6月18日(土)提出 4000字程度
人間科学研究科 社会環境学
コミュニケーション社会学 博士課程2年
玉城福子

・ **ジュリ：売春の容認・助長／ジュリ：家父長制の犠牲者**

沖縄のフェミニストの中では、ジュリは家父長制の中の犠牲者であり、「慰安婦」もその延長線上にあると捉えられていた。一方で、沖縄における「慰安婦」問題は、日本と沖縄の植民地主義的な関係の中で生じた問題であるとも捉えられていた。

・ **「慰安婦」：連続(家父長制・軍隊による性暴力の被害者)**

フェミニストたちはジュリと「慰安婦」の連続性を強く意識していた。1992年の「慰安所」マップ作成時には、元「慰安婦」であり、元ジュリでもある女性たちが自分の過去が家族に知られることを恐れているという現状を意識し、当事者へのアクセスを意識的に避けていた。

4. まとめと今後の課題——ローカルな力のせめぎあい——

沖縄戦の語りをめぐる議論は、沖縄人が日本社会の中で過去から現在までマイノリティの位置に置かれていることもあり、「本土」対「沖縄」という構図でこうしたコンフリクトが捉えられることが多かった。「本土」対「沖縄」という視点からの分析の有用性や意義に異論はないが、沖縄内部のジェンダー、階層などコンフリクトが見逃されてきた。

今回の調査では、沖縄人「慰安婦」に着目したことで、「慰安婦」への意味づけのローカルな文脈の一側面が見えてきた。様々な立場によって、意味づけが異なっており、それぞれは対立していた。今後の課題として、第一に、今回は「当事者」、「祭りを支えた人たち」、「祭りに反対した人たち」と分けて分析したが、このグループ化の妥当性やグループ内の差異にもっと注意を払って分析する必要がある。第二に、調査対象を広げることで、より実証的意義が高まると考えられる(例えば、自治体の長など)。第三に、先行研究が明らかにしてきた「本土」対「沖縄」の間の対立と、今回明らかになったような沖縄社会内部のジェンダーや階層間の葛藤とどのように影響しあっているかを分析する必要がある。